
Angel

こつぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel

【著者名】

こつぶ

【あらすじ】

これはコナンのある新蘭企画で、10月4日は天使の日＝蘭ち
ゃん！という日になつたことでそれに便乗して書かせていただいた
小説です。投稿した話より少し長めになつています。蘭ちゃんの遠
い前世は天使だった！？・・・コ哀ではありませんのであしからず
(笑)てか哀ちゃんでここにやいへへへ

1 ランver.

とても温かい春の日。桜が散っていく樹木を教室で眺めながら、私は少しだけ夢を見る。

それは遠い遠い昔。私が『私』ではなかつたころの記憶。きつと夢から醒めれば忘れてしまう。

天の上の女神様と、私の中にいる『私』だけが知っている、遠い遠いキオク。

ず一つと昔のそのまた昔。「毛利蘭」の前世のもつともつと前の時

代。

「私」は一人の小さな天使だった。

名前はラン。

偉大な女神さまの許に仕える数多い天使の中の一人。

いつこの世に生を受け、女神さまの許に仕えていたのかわからない。けれども誰よりも綺麗で賢明な女神様のお傍にいるだけで、私はとても幸せだった。

自分の体が消えてなくなるその日まで女神様に仕えよう、そう決め続けていたはずなのに。

あるとき私は犯してはならないことをしてしまった。
人間に恋をしてしまったのだ。

その日もいつもと変わらない日常の一つになる筈だった。
女神さまから離れ、一人空中散歩を楽しんでいる時、私は彼に出会つた。

名前は知らない。それは一人の羊飼い。

白い肌に、蒼い瞳。

纖細な眉に、すらりと伸びた高い鼻、薄い赤みを帯びたその唇。
黒くて細いそのサラサラな髪の毛は、日光に照らされて透き通る色
を見せる。

何百もの羊をオーケストラの指揮者のように木の棒一本で操るその姿は、まるで壮大なミュージカルを見ていくようだ。

こんなに綺麗な人間がいるとは思わなくて、しばらく彼に心を奪わ
れていた。

そう、私は彼に一目で恋に落ちた。

「・・・誰？」

華麗なステップをやめ、彼は空を見上げた。

びくつとして私は体を強張らせる。

彼から私の姿は見えていないはずなのに、何故、判るのだろう。

「そこに、いるんだろ？」

低くて心地よい彼の声に酔い痴れつつも、私はなるべく気配を消すように心掛けた。

人間と天使が交流を持つことは決して持つてはならない掟。話せば話すほど彼に惹かれていくことは容易に感じ取れた。

「僕はクドー。・・・君は誰だい？」

天に向かつて手を翳すその少年。そしてその動作でようやく気づく。自然すぎて気づかなかつたこと。

彼は目が見えなかつた。

だからこそ、別の神経が研ぎ澄まされていくのだろうか。

彼は私を『いる』ものとして捕らえていた。

『私はラン。・・・天使のランよ』

彼に自らをアピールしたい。ここにいるよと伝えたい。

だけど、伝えたら私が天界を追放されるだけではなく、大好きな女神さまにもきっと重い処罰を下されるだろう。だから私は名乗らずその場所から去るしかなかつた。

「恋をしますね」

ある夜、女神さまの髪を洗つて差し上げていたときには、その方は私に問われた。

「・・・はい」

けれども決して恋に向かう」とはいたしません。

大好きな女神さまのために。女神さまが大好きな自分のために。

決して実ることのない恋に自ら足を踏み入れることはいたしません。

せめて彼が素敵な女性に巡り合えますように、心よりお祈りします。
よう。

切なくて、胸が痛くなるほど苦しくて、涙が止まらなくて。
女神さまはそんな私の体をぎゅっと抱きしめてくださった。

「祈りましょう。あなたの来世を。あなたが来世は人間に生まれ
われますように。そして彼とこの先永久に結ばれますように。願え
ばきっと叶います」

女神さまの笑顔はとても優しくて、美しくて。私の心は一瞬のうちに
に救われた。

私は彼が長い生涯を終えるまで再び彼の許に下りることはなかつた。
けれども、私は風の噂で彼が生涯一度も妻を娶ることが無かつたこ
とを知つた。

「次の世までのお預けだよ」

彼が回りの人に生前こう語つていたそつだ。負け惜しみではなく、
本心からの言葉に見えたという。

はたして私が人間であるならば『運命の人』になり得たのだろうか。
次の世ではなり得るのだろうか。

どれだけ悩んだかわからない。
どれだけ祈つたかわからない。

人間になれますように。彼と出会えますように。彼と一緒になれま

すよつじ。

次の世に生れ、願いを込めて。

「おい、蘭。……にやつてるんだよー。」

コシンと何かで頭を突付かれて、私はようやく目が覚めた。無糖の缶コーヒーを手に抱え、今では学校公認の幼馴染で『恋人』である新一が呆れ顔で自分の顔を見つめていた。

「……れ、新一」

「珍しいな、授業中居眠りとかよ。……部活や家事やなんたらで疲れてるんじゃねーのか?」

「そんなことないよ」

ふわあっと大きく欠伸が出て、慌てて手で口を押さえながら、彼を見上げる。

ナンだらう、この気持ち。
とても懐かしく、温かい。

夢の中で出会った一人の天使と一人の羊飼い。
初めに天使が恋をして、「氣づく」とはできても声をかけることは
できなかつた。

二人の名前が思い出すことはどうしてもできなかつたが、そんな二
人を見てとても温かい気持ちになつたのを覚えている。そして、目
覚めて最初に彼の顔を見て、とても安心したのも。

なぜこの夢を見たのかわからなかつた。前日ファンタジー小説を園
子から借りて読んだせいなのか。その登場人物に羊飼いも天使も出
てきたことはなかつたが。

「ねえ、新一」
「ん？」

コーヒーをぐびぐびと喉に流し込みながら、彼は目線だけ私に向け
た。

恋人でもあまり言葉にはできない。

だけど、あの天使に勇気を貰つて、私は彼に尋ねた。

「私は新一の運命の人になれたのかな？」

瞬間、彼は驚いて口の中に含んでいたコーヒーを全部噴出した。

彼の答えはイエスかノーか。

その答えはきっと誰でも、わかるはず。

2 クドーバー・（前書き）

「ちあは全然修正ありません。

天使ランに出会った後日の話です。

2 クドーバー・

空を見ていた。

そこから一枚の白い羽がふわりと類をなでて落ちてこくよくな気がして。

そしてそれを落としたのは白鳥のよつな羽を持つ天使のよつな気がして。

彼女が、この大空を、俺の頭上を、通り過ぎてくれるよつな気がして。

「は？ 何やて？ クドー。スマンけび、もう一度言つてくれ。最後まで聞こえんかった」

「だから、天使を見たんだ」

いつものように羊を一つの群れにまとめる仕事をしていた俺は突然の親友の来訪に喜んだ。

手紙も人も遣さずのことだが、それが彼らしさを物語っていた。ヤツと会うのは2年ぶりだ。いろいろ話すこともあつたけれど、一番最初に聞いてもらいたいことがあつたんだ。・・・今まで誰にも話すことのなかつたこと。2ヶ月前に「見た」彼女のことを。

「何言つとんねん、自分、夢でも見たンぢやつか？」

「夢じやない。・・・確かに、彼女は」

「せやかでお前は・・・目えがつ」

焦ったように、動搖したかのようにヤツが小さく叫んだ。しかし、俺が断固として変えない視線を見て、ヤツは信じられない、というような表情をした。

「・・・ホンマに、見えたんか?」

「ああ

何年かかつたって、『見えるもの』が『見える人』にはわからないだろうけど。

俺は小さく苦笑しながら、あのときの記憶を思い返していた。

何も見えない闇の中で、俺は気配だけを感じていた。
優しく香る温かい空氣。華のような吐息。緩やかな流れ。
手を伸ばせば触れられるような、そんな感触。
でも、その場所は同じ視点ではなく少し高い位置にあって、頭上で自分を優しく見下ろしているような、そんな気がした。

『僕はクドー。・・・君は誰だい?』

人間じゃない。そつどこかで理解つていた。
幽霊なのか、妖精なのか。・・・生身の体を持たないもの。
けれど少しも怖くなかった。声が聞きたいと思つた。
それなのに。

彼女はとうとう少しも声を出すことほしなかった。

ふわり。

頬に柔らかい羽毛が優しく撫でる。

温かいぬくもりを持つて、まるで綿毛のよう柔らかくて。しなやかで。

一瞬見えた、彼女の表情。

白い肌、すらりとした青い瞳に長い睫。形のよく小さな鼻に、 puff

くちとした唇。

真っ白い洗い立てのカーテンのようなドレスに身を包み、そこから飛び出る白くて細い手足。

そして、大きな翼。

色覚なんてとうに忘れてしまったのに。人の表情すら遠い昔に置いてきてしまったのに。

こんなに、明瞭にその人の顔が日蓋の裏に現れて。

俺は、彼女に恋をした。

きっと彼女は地上に降りた天使。ふらりと遊びにきた心優しい少女。手の中にあるその感触が、彼女がいた証。

けれど、それを布に包ませようとポケットから端切れ布を出した瞬間、その羽は跡形も無くなつて

彼女の証は自身の中から消滅した。

それはきっとサヨナラを告げるメッセージ。

俺はそう解釈した。

けど。

「俺は諦めが悪い男でね」

俺は、クツクツと低く笑つた。

好きな女がもうきっとこの世では会えないのならば。

「待つしかねーんだ」

「待つ?」

訝しげにヤツが俺を窺い見る。

「ああ、彼女が人間になれるまで。だって俺が天使っていうガラでもねーだろ？」

羽に天使のわつかなんて俺にはきっと似合わない。

「せやかで、そんなんきつと氣の遠くなる話やで？ひょっとするといくらクドーが待つとつても、そのねーちゃんが人間になれへんまかもしれへんやんか」

「それでも、俺は信じたい」

彼女にいつか、会えることを。

その声を聴けることを。

その体を抱きしめられることを。

「そんな風に考えたら、待つことなんて全然苦じやねーだろ？」

俺はっこり笑ってると、ヤツは「ホンマクドーは相変わらず変わったやつぢやなあ」と豪快に笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1704b/>

Angel

2010年10月22日13時49分発行